

ペアレンティングによる親子介入支援の 長期的効果検証とマニュアル作成

1. 研究の目的

(1) ペアレンティング理論の家庭における長期的実践とその効果の検証

①現在参加中で継続希望の被験者、および新規に募集し参加希望する被験者において、ペアレンティング効果を主観的・生理学的・心理学的・脳科学的に解析・検証することで、長期効果の実証を得る。

②新規参加家族と長期継続家族の比較検討や同一家族での経時的変化の検討

(2) 得られた結果をもとにした理論の体系化とペアレンティングマニュアルの提言

①この実践理論に基づいたペアレンティングマニュアルを社会に広く認知させることで、密室育児で不安を高めた親が虐待や過干渉、共依存などの不適切な育児に陥ってしまう事例を減少させ、適切な子どもの生育環境が担保され、より良い発達が促されることを目的とする。

②蓄積データと個々の事例検討による独自のマニュアル作成

2. 研究の計画

(1) ペアレンティング理論の家庭における長期的実践とその効果の検証

①家庭におけるペアレンティング（親などが子どもに与える生活・養育環境）の質が、遺伝素因以上に子どもの思春期以降の心身機能と行動・情緒に大きく影響するという科学的根拠をもとに、2019年8月より開始している親子介入支援を継続して行う。

②上記継続支援により2019年8月～2020年3月までに2回以上採取した子の発達障害関連評価、親子の生理学的評価、心理学的評価、及び脳科学的評価の測定結果の解析を行い、個人データの前後比較と、集団としての比較、また新規参加家族と長期継続家族の比較検討や同一家族での経時的変化の検討を行う。

(2) 得られた結果をもとにした理論の体系化とペアレンティングマニュアルの提言

①複数の学会での発表（小児心身医学会、日本心理学会などを予定）、および論文作成を予定。

②被験者集団からの蓄積データと個々の事例を詳細に検討し、独自のペアレンティングマニュアルの作成を目指す。

3. 研究の成果

(1) ペアレンティング理論の家庭における長期的実践とその効果の検証

①2019年8月より開始している親子介入支援を継続して行う予定であったが、2020年1月より蔓延したCOVID19感染拡大の影響のため、対面での介入・データ採取がほぼ不可能となった。そのため、2020年度は、4月に質問紙送付による限定的なデータ採取を行うのみとなった。また、対面での介入がCOVID19感染拡大の影響により不可能になった親子に対して継続的にかかわり続けるために、オンライン面接の機能を導入する目的で、計画の時点では入っていなかった、モバイルコンピューター等の機器の購入を行った。

②介入支援前後のデータ採取は、2017年8月、2018年2月、2018年8月、2019年8月、2020年4月（質問紙送付による限定的なデータ採取）の計5回行われた。親子介入支援は2017年8月～2018年8月に定期的に行い、いったん中断したのちに2019年8月～2020年2月に再び定期的に行われた。全期間継続して参加した親子9組のうち、データがすべて採取できた3組（いずれも子の自閉症スペクトラムの診断あり）について検討を行った。採取・解析したデータはTK式親子関係テスト、S-HTP描画テスト、STAI不安尺度、ストループテスト、PARS自閉症尺度等である。TK式診断的新親子関係検査（親→子、子→親）の下位項目「不満」と「干渉」において危険・中間領域に入ったのは、2017年8月には3家族分のデータ中40%であったが、介入支援を経た2018年8月には10%に減少した。しかし、親子介入支援の休止期間を経た2019年8月には、3家族分のデータの50%に危険・中間領域が増加した。これが、介入支援を経た2020年4月には33%に再び減少した（図）。同様に、子におけるS-HTP描画テストの評価も休止期間に増悪し、介入支援の再開で改善が見られた。

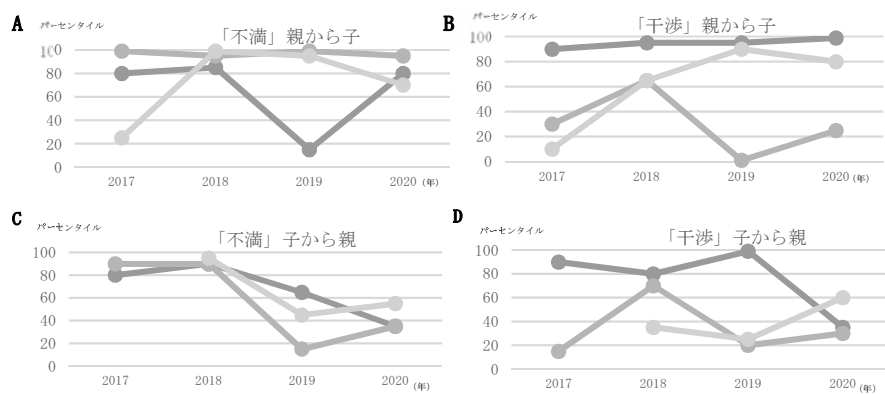


図 TK 式診断的新親子関係検査「不満」「干渉」の 3 事例比較
凡例：事例1 ● 事例2 ● 事例3 ●

(2) 得られた結果をもとにした理論の体系化とペアレンティングマニュアルの提言

- ①2020年度当初は複数の学会や大会での発表・招待講演を予定していたが、COVID19感染拡大の影響により多くが中止延期など変更となり、計画通り遂行できなかった。
- ②多くの得られた蓄積データから獲得した親子介入支援の実際を、ワーク形式にまとめたうえで、親子支援マニュアルとして文章に起こす作業を行った。現在、出版社と交渉中である。

4. 研究の反省・考察

(1) 考察

- ①親子介入支援を継続することで、全体として親子関係は親子双方とも段階的に改善し、長期効果があることが考察された。親子相互作用も存在した。しかしながら、介入支援が途絶えた休止期間を挟むことで親子関係が平均的に一時悪化することも観察された。このことより、ペアレンティングを用いた親子同時介入支援は親子相互作用をもたらす有効であるが、あくまで、専門家による親子同時介入支援が存在し続けることが必要であると考えられる。
- ②子の描画から推察された認知機能に関しても、親子同時介入支援により改善が認められ、効果があることが示唆された。親子介入支援が中断することにより、親子関係や子の認知機能等に変化がみられたことより、継続的なペアレンティング・トレーニングを用いた介入支援を親子同時に行うことは、特に自閉症スペクトラム等発達障害のある児の養育家庭において、良好なペアレンティングの維持に有効であることが示唆された。

(2) 反省

- ①上述のように2020年2月よりCOVID19感染拡大の影響を受け、脳機能測定等の最終測定が延期となっている。現時点でも対面の介入支援を回避する意向の被験者がほとんどであるため、再開が見通せない状況である。実質的には再度の実験休止期間となっており、コロナ禍による家庭生活環境の変化による影響も出ていると思われるが、実測できない状況である。TK式親子関係検査等、質問紙での検査データについては今後も郵送して配布・収集の方法を用いて継続して採取していき、状況を見ながら他の生理機能検査や親子同時介入支援を再開したい。
- ②特に小児被験者からの協力が得られず、欠損値となるデータが散見されるため、データ数が統計学的検討に値しないものがある。COVID19感染拡大の終息後は、被験者を増やすことも考慮に入れ、研究を継続したい。

5. 研究発表

- (1) 学会誌等
なし

(2) 口頭発表

①成田奈緒子

ペアレンティングを知り、明日からの対応を考える
巡回拠点にしうき専門研修 招待講師2020. 11. 7東京

②成田奈緒子

幼児期の子供達の現状と今後必要な事

㈱アイルデンタル主催「6歳までに優先すべきことセミナー」招待講師 2020. 11. 8東京

③成田奈緒子

乳幼児期の睡眠・覚醒生活リズムの育成について

日本眠育推進協議会眠育シンポジウム 招待講師2020. 12. 26オンライン

(3) 出版物

①成田奈緒子・石原新菜

子どもにいいこと大全

2020. 8. 31 主婦の友社

②成田奈緒子

子どもの自己肯定感は親のひと言で決まる！

2021. 1. 21 PHP研究所